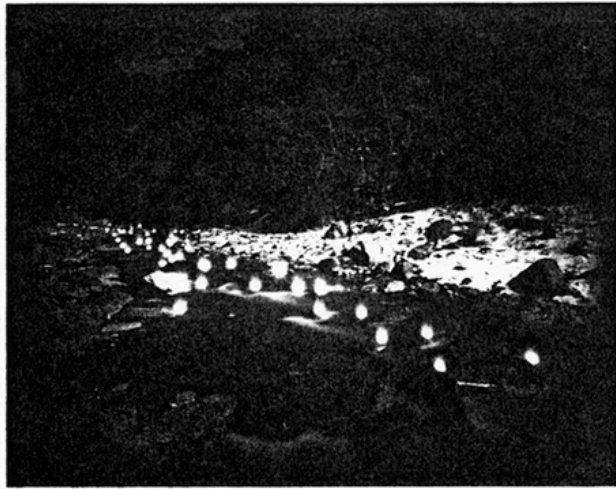


## 時の隙間のパフォーマンス

写真=佐藤時啓

解説=笠原美智子



写すべきことなど何もないこと。現代写真は結局、そうした認識から始まったのではないか。

それは随分と絶望的に響く言葉だけれど、そうでもないのである。写真はへたな義務感から身軽になつて、自由に遊び始めた。

胸を張って伝えるべき、全ての人に有効なメッセージも、共有できる思いも、何もない。そもそも、写真が現実の断片を切り取ることで、何かそうした真実を伝えることができないというぬぼれと錯覚が、写真の方向性を失わせてしまつたのではないか。

かといって、魂を揺さぶられるような衝撃力を持つ全く新しい視覚など、様々なイメージが増幅し、拡大していく現代社会において、なおも存在するとは思えない。視覚のための視覚など、溢れるようなイメージの洪水のなかで、私たちはとくに食傷気味になつていく。

モダニスト達がこころ年近くも試みた、より完璧な抽象的造形美の追求は写真独自の美学、写真独自の言葉を発明することに成功した。それは確かに、写真を美術館に受け入れさせ、欧米の大学のように、文学を語るのと同じ様に写真を考へる状況をもたらした。そしてそうした膨大な美の集積は、

何かを待つて、埃を被つた本のなかに、収蔵庫のなかに眠る。いつたい何を待つて？

写真は単に、世界をより良く知るための窓ではないのではないか。写真は単に、その作品を創つたアーティスト自身を写す鏡でもないのではないか。

コンセプトリアルも、コンストラクティッドも、ミックスト・メディアも、マニピュレーションも、ニュー・トポグラフィックも、現代写真を語るそうした横文字の羅列は、分類のための単なる便法で、印画紙に表わされる視覚的特徴だけを論じているのであれば、さしたる意味は無い。問題とすべきは、そのスタイルの背後にある態度の転換、写真の応用の変化である。

延々と続けられてきた視覚の革命は観る人にショックを与え、新しい意識を提供することをもくろんできた。モダニストの挑戦は正にそこにあった。

現代写真における写真の意味の転換は、モダニストが「感じからめになった」という義務感や使命感から写真を解放する。《作品を創る》という呪縛から、写真家を解放する。写真は難しいものでも、崇高なものでもなく、言葉と同じ様に、誰でもが簡単に使えるディテクションの手段である。写す

べきものは何もなくても、写したいことはいくつもある。当り前と思われていることの意味、その不確かな根拠を一つ一つ突き崩して、自分に引き付けた意味の再構成をする。それをするには写真は随分と有効な手段である。

佐藤時啓は自分の身近な場所に三脚を立て、長時間露光の間に光を走らせて時間の隙間をパーフォマンズする。

放課後の大学の構内はしんと静まり返り、そこに多くの学生や教師が集い、行き来していたことなどすっかり忘れ去つたように、知らん顔をする。自分だけが世界に取り残されたような場所に立つて、場所を見つめていると、何かの拍子に賑ひの気配がクスクス笑いながら背後を通り過ぎる気がする。

佐藤時啓は気配だけが残るそんな空っぽの場所を乱す侵入者になる。光を携えてその場の空気をかき乱し、時には光も彼自身もその場の気配に捉えられて一体になる。それは随分と賑やかな写真である。静寂がピンとはりつめた緊張感を満たしながら、時間の狭間に滑り込んでしまったクスクス笑いが聞こえる。佐藤時啓はそんな気配に満ちた濃密な空気を肌で感じながら、そんな気配をもっともせ

ずに、嬉々として走り回る。ペンライトを上下に揺らし、手鏡で太陽光を反射させて、かき乱された気配の空間に白い線や蛍のような光線を刻印させる。

彼の写真の屈託の無さはどうだろう。軽快に、無邪気に時の狭間を遊ぶ。写真を利用しながら、印画紙に浮かぶイメージを計算しながら、しかもなお、したたかに繊細に本気で遊んでいる。走り回る自分と、乱される空気と、それを肌で感じる自分と。無味乾燥に存在する退屈な場所と時間が彼の存在で一挙に目覚め、ザワザワと動き出して、とうとうと自分の存在を主張し始める。

彼の写真においては、仕上げられた一枚の写真の意味と同じ位、写真行為そのもの、その行為をする自分自身に重点が置かれている。写真行為をすることで、まずは写真の意味自体を考えている。それは現代写真の態度の獨創性と呼べないだろうか。

(かさはら みちこ 写真批評家)

さとう ときひろ 一九五七年山形県生まれ。八三年東京芸術大学大学院修了。八一年より彫刻と写真を組合せた作品を発表していたが、八八年からは写真作品に専念。個展、グループ展を中心に活躍。九〇年東川賞新人作家賞受賞。